

四歳児

四月の一週間



関 治 子

組編成は、三歳からの十四名と、四歳新入の二十一名が混合した三十五名からなっている。混合の組であるが、それぞれが早く安定感をもって、楽しい集団生活をすべり出してほしいと第一にねがった。そのためには、じゅうぶんにあそぶこと、必要な生活習慣を適切に指導して身につけること、その上で、できることから、自分の考えをもって行動する基盤をつくっていったらと考えた。

ここに挙げた四月の一週間は、三歳からの幼児と四歳新入の幼児とが、何とか一つの集団生活をおくるようになっていった時期である。また、生活習慣を身につける大切な時でもあり、自由のびのびと生活するための基ともなる時期であった。

四月十四日（金）曇

四月十日からはじめた朝の手洗いとうがいのは、習慣となってきている。朝の挨拶は、まだ小声でつぶやくもの、よろこび、はしゃいでかけこんでくるもの、そばにきて、はっきりいわなくては気のすまないものというろでなかには、ただだまってここにこつとしながら、教師の身体をたたいていくものもある。

朝の迎えいれは、その日を左右する位大切なので、今は、それによって、幼児と教師の親しみの感情、また、よい人間関係が出来ることを第一として、挨拶の形の上手下手は問題とせず、気持の交流をはかるように考える。

ひと通り、好きなあそびが始まった。主に、新入の幼児は、男児が、一人あそびを始める。線路、乗物の遊具であそぶ。三歳からの男児は、かたまつて、あそびなれていく積木や乗物遊具をひろげ、次に外あそびへと移動していった。この中に新入の幼児が一人だけ入っている。あとは、新入同士が二人ずつ、かなり強力な仲よしとなった。女児の方は三歳からの二人だけでままごとをしているのが一組あとは、三歳、新入と混り合って八人が、ままごとにはいつている。新入の二人に、三歳からの男児が一人、一しょになって、たくさんある遊具を使ってお店やごっこをしている。そのほかの女児は、一人で本をみるか、えをかく、教師のまわりに絶えずついている、時折、友だちともつく、といった状態

である。

十二日から、外あそびをしているので、今日あたりは、自分の意志で、外へいったり、外靴とはきかえたりを楽しんで試みていく感じがする。入園の日以来、母親と離れない男児Aには、母親と教師との連絡の結果、順序たてて、離していくように話し合った。今日は、母親がおつかいに行くので、幼稚園にはついていけないことになっている。本人も納得はしているのだが、顔をみるまでは、涙がかわかない。しかし、遠くに一人でいってしまったりせずに、教師の周辺で泣いているので、もう時間の問題という気がしている。

十時十分に、母親の顔を見ると、泣きやんで安心したのか、外にいけと命令して、あとは砂場で、ずっと安泰に一人あそびをしていた。お帰りの前には、「ママ、ママ」と時々叫んではいたが、教師に声をかけられながら、お帰りまで、もつことができた。

今は、午前中の保育なので、お帰りの前にみんなで、「結んで開いて」をしてあそぶ。ほとんど全員が結んで開いては知っているが、開いたり結んだりの順序などは、はっきりしないものもある。その手をどこにするか、ここで上にあげたり、友だちの肩につかまったり、鳥になつたりしてあそんだ。

幼稚園で使う手ふきが、汚れてきたので、自分の持物を、自分

で持って帰ることをやってみる。少しの汚れだと、しばらく、手ふきの前で、汚れているかどうか考えこんでいる姿もある。

この一日を、ふりかえてみると、幼児の状態をおつてみたが、教師の言動というものが出てこない。教師としては、一人の泣いているAを手元におきながら、あちこちと、話しかけたり、手をつないで、一しょにグループの中へいれたり、一しょにつくつてあそんだり、その間に、手洗いの使い方を教えたりというように、忙がしい一日をおくったことであつた。

四月十五日(土) 曇

ゆうぎ室にいて、広い部屋で、みんなで一しょにあそぶ経験をもつた。列になって、並んで音楽に合わせて歩いてみる。並んで歩くことがよくわかって、おとなしく歩いている。元気よい動作をするために、広い部屋いっぱい、好きな方向に、走ったり、スキップしたりしてみる。解放されたよろこびか、それとも、まだ少し恥ずかしいのか、とりわけ男児がはしゃぎだした。やっと親しくなった友だちに近づこうと必死でかけてみたり、キヤーキヤー大声を出しているものもいる。幼児に親しみのある動物やあそびなどの模倣、自由表現を試みた。大体が、はしゃぎ気味である中に、三歳からの幼児が、一生懸命音楽に合わせてうたっているのが、成長のあとがあると強く感じさせられた。金魚の



自由表現で、床に腹這いになって、身体を動かしているようすをみて、自分の考えで出てきた表現を本当に大切に育てたいものと痛感すると同時に、教師のちょっとした言動で、幼児を規制してはいけないと思った。

それぞれが、自分で遊具をみつけてあそぶようになってはきたが、一方、はめを外し出したというか、嬉しさの余り、いささか興奮状態と見える。ある意味では、よそゆきの気持がとれて、気分がほぐれてきたともいえるのであろうか。

お帰りの時、二人の男児が、一人の男児の隣の席をとり合った。一人が、おそかったので、ゆずらねばならなかった。一応、教師の話で納得してはくれたのだが、がまんしたと思ってみていた矢先のこと、「バカヤロー」ともう一人に叫んでいた。さぞ、くやしかったのであろうとは思いますが、がまんしたということは認めてあげて、帰りの先頭にして、この日を終わらせた。

四月十七日(月) 雨のち曇

心配していたAも、元気にはいつてきて、まっしぐらに、手を洗いにいった。そして、気に入ったブロックキャップを使いはじめた。

天候も影響してか、ままごとのグループと積木組木のグループとが、部屋の中で、互いに交流しはじめた。親しい気持が働きは

砂場で教師とともにあそぶ 近くでみている幼児もいる



じめたのはよい傾向だが、方法が、何とも賑々しい。組木でつくったピストルでうちに行く。うたれる方は、キャーキャーよろこびながらま

まごとの戸

棚の後はいりこむ。

遂には、棚がたおれて

しまった。危ない状態

ではないがままごと道具が、散ら

ばった。すると、三歳

からのピストルでうっ

ていた幼児たちが一生

懸命片づけはじめた。そしてきれいにままごとの場を直してくれ
た。「きれいに直して下きってよかったわね。ありがとう。これ

で、またあそべるわね」と思わず、みんなの前でほめてあげた。グループの人数は、かなり多くなっている。しかし、朝一しょにあそんでいても、ひとしきりあそぶと、ちがうあそびにはいつて、友だちも変わっている場合がかなりある。

四月の発育測定で、身長と体重を測る。男女にわかれて測定する。男児の方は、椅子の上ののったり、大きすぎ。また、よく着られないのも、男児に多い。女児は、割合と静かだった。いつも大声で愉快に話をするB子が、一人で口を結んで、さつきと後の釦までしたので、大いにほめてあげる。

朝は、あれほど張り切っていたAであるが、発育測定の新しい部屋へは、母親についてきて貰わなくてはならなかった。すんだ後は、もう平気、かえって元気が出て、他の男児とさわいでいた。

お帰りの前のひととき、みんなで、遊具の扱い方について、話し合った。われ易いものは、足で踏みつけてしまうような所に散らさないようにするとか、幼児の中から、なるべく意見をいわせて、みんなで約束した。

四月十八日 (火) 晴

久しぶりに晴れ上がって、外で大いにあそぶことができた。Aは、もう大丈夫、ただ、折角あそびはじめたのに、写真をとる

並んでゆき室からかえる



時、ひときわぎあった。嫌なのだが、それでも、部屋靴のまま、

外にでてきて、だんだんに写真に近づいてきた。もう一人、Aがこうして、母親からだんだんに離れてきているのに前後して、女兒のCにも、時折、母親の顔がみたくなるものがあった。今日も、「ママは？」と時折いいながら、あそびにまぎれている。後半、庭の外にいる母親に近づいていったりがききわけてはいるので、こちらも、もう大丈夫と思う。新入の男児の中には、昨日まで、元気一ぱいで、大はしゃぎであったのが、今日はおとなしく

砂場であそんでいたりするものもある。また、甘えて甘えて、抱きついてくるものもある。ようすが、一日一日とちがうので、それが本当の姿なのかと考えてしまうことが多い。

その間、新入の方が概して活発で、三歳からの方が、おとなしく消極的な傾向がある。二人だけで、ずっと山で草を摘んで過ごしたり、男児の一人は、紙を部屋に捨てたり、遊具を足でけつたりして、なかなか、一年間やってきた簡単なきまりを守れない。これらの行動には、教師が、つい安心感から、三歳からの幼児を、無意識のうちに放任していた結果と、反省する。集団生活に不馴れな二十一名を適切に誘導しながら、三歳からの十四名と合流させていく悩みも感じさせられる。しかし、幼児のこと、思いがけない、新旧の幼児のあそびに、喜びを感じることもあるし時期的に解決することも多いと思う。

四月十九日(水) 小雨のち晴、時々曇

みんな、それぞれのアそびを始めて、いい具合である。Bも、もう大丈夫、Cは、少しだけ母親の顔をみにいったが、外アそびをはじめると、大層活発。お山では鉄棒を、難なくやってのける。ちょっと頭をおさえるだけで、前まわりもやってしまう。教師としては、Cを中心に動いた一日だった。これで、自信と安定感をもってくれたらと、一日中アそんだ。



ゆうぎ室のカラーテレビを、各組みんなで一しょにみる。部屋を移動する時は、Aは、一応「ママ」とよぶ。しかし、もうついてこなくても、がまんできるようになった。

四月二十一日(金) 晴

二十日の木曜日が教育実習日で、実習生が六人いたのと、この日、春の定期身体検査があったので、一日ずらして二十一日のことを記してみたい。

暖かく外あそびがさかんで、外でたくさんあそぶ。主に砂場あそび、ブランコなどの遊具であそぶ、お山へ草摘みなどで、まだ、集団あそびは、自分たちだけでは始められない。「かごめ」や「だるまさんがころんだ」など三歳の時にあそんだようなものも、一しょにあそびたいと計画はもっているが、今日は、明日の初めての誕生会のために、おかし入れをつくりたいと思っている。

みんなが、それぞれのあそびに入って、少したった頃から、教師は、机に、おかし入れの材料を持ってきた。まわりにいた幼児と、常に教師の周辺から離れない幼児とが、「何するの?」と寄ってくる。説明をしながら、紙や、セロテープ、クレヨンを更に準備していると、「あたしもつくるわ」「僕もつくるわ」と、新しい道具をもって集まってくる。一つの机を囲んで、十二、三人



で始まった。教師も一しょに、

紙をまるめて、セロテープでくつつけたり、模様となる絵をかいたりする。ともかく、一枚の紙から、おかしを入れて、落さないものをつくり上げることである。その必要から、一生懸命、完成させようとしている。全部

紙をまるめることが思いつかない幼児もいるが、「こうやって丸めると、出てくるわ」などと教師はいいながら、自分のを試みている。テープカッターを始めてつかう幼児がたくさんいる。二人ほど指を傷つけてしまった。「余り一生懸命切ったら、指まで傷になってしまったわね。今度はこうして切りましょう」といって、

要領を手をとって教えてみる。指のばんそうこうは、大事で、始終ながめている。

今日のおかし入れづくりは、出来栄は、粗末ではあるが、自分の力でつくったものとしては、こんなに貴いものはない。自分の作品を、定められた所におき、紙屑、鋏を始末することも忘れがち、ここにも大切な仕事がある。出来た幼児は、またあそびにいき、友だちからきいたり、自分でみにきたり、教師に誘われたりして、順々に、自分のおかし入れをつくって、明日の誕生会の準備もできた。期待に胸おどらせて、はじめての誕生会を待つこととなった。

軌道にのるまでには、かなりの月日が必要であるし、繰り返しごとでも大切である。このような四月を経過して、一年間を終わった現在、感じることは、幼児期の一年間の成長の大きいことである。本質的には、幼児は、それほど変化するものではないように思うが、集団生活に入りたての四月頃には、過渡期であるところから、定まらないいろいろな面をみせてくれる。ある程度、時間をかけて、幼児を観察しないと、間違った印象をもって接してしまう恐れもある。しかし、どんなことも、教師と幼児との心のつながり、互いの信頼関係ができることによって、進められていくのではないかと思いを深くしている。